



The Kyoto University Library Bulletin

静脩

1976年9月

Vol. 13, No. 1

再任にあたって

附属図書館長 林 良平

この4月、わたくしは、商議会で再び附属図書館長に選任され、ひきつづいて図書館の運営の責任を担うことになった。この機会に、過去3カ年にわたくしの多少とも努力して来た問題点をひろって、今後の附属図書館運営の方向について全学のご関心を得たいと考えている次第である。

戦後、附属図書館の緊急の課題は、戦災の後の、著しく不便な学生諸君の学習の場と図書を何とか整理しようとする事、及び、全学蔵書の総合目録を完成し、少なくとも、学内において、相互の連絡の機能を高めようとする事であった。戦後30年を超えた今日からみれば、大した話題ともならない問題であるかも知れないが、歴代館長・職員のこれに費した努力と成果は、歴史的にみて、極めて重要かつ有意義なものであった。

しかし、このことがほぼ一段落し、学生諸君への奉仕についても各部局図書室にもみるべき進展があり、もとより完全とはいかに程遠いけれども、格段の改善のなされた今日、附属図書館に課せられた使命は、学生用図書の整備利用はもちろんのこと、さらに、研究用図書利用についていかに寄与できるかという新しいテーマにも取り組まねばならないことになった。全学共通の研究用図書や目録、境界領域に関するものへの要求、といった蔵書の内容の変化、さらに全学で蔵書についての相互調整の必要、さらに、新しく発展する図書館業務処理の方法に応じて、職員の研修自己開発や、業務面での全学調整など、新しい使命が附属

図書館に課せられて来た。その上に、学外の他大学図書館との間で蔵書の相互利用の窓口には終局的に附属図書館があたらねばならない。このような現象の底流をなすものは、爆発的な情報量の拡大と図書費が必ずしもこれに伴えない現状である。

これらのことは、本学図書館(室)が一体として機能することを必要とした。この調整にあたる附属図書館の業務量は飛躍的に拡大すると同時に、事からの性質上、全学図書機能の協力システムが不可避となって来た。

わたくしが三年前、館長に選任された当時、附属図書館のかかえていた問題は、大略このようなものであった。わたくしが、まず第一に、手をつけなければならなかったことは、全学の図書利用者・図書職員との相互理解であった。この大学の沿革から想像できるように、本学の図書のシステムは細部においては、各部局別々であるといつて多言でない。人びとはみずからが生み出し、その中で育ったシステムに誇りと自信と、そして愛着をもつことは当然である。それは、それとしてよいことなのであるが、ある場合には、異なったシステムに対する理解を困難ならしめる要因でもある。そして、各部局と附属図書館の相互理解にも障害となることもあった。

相互協力の前提としての相互理解。いづく行くいがたく、心焦るのみで道の遠いことは、しばしばであった。理解のためには、現状を事実として直視することも必要であった。これまた、多くの

心理的負担を伴うものである。このようなプロセスを地道に積んだ上で、全学図書機能の新しいあり方を定着させること、附属図書館の立場からいえば、そのあり方を明確にすること、これが緊急の課題である。すべてのことに完全ということは望むべくして達し難いことのように思う。多少の不備は残るといふ批判はつねに避けられないであろうが、今後はこの課題を一つ一つ解いていくべき時期ではなからうか。殊に、外から、図書館システムの進展の波が静かであるが、確かな足どりをもって迫って来ているように思われる。文部省や国立大学協会、さらに国立大学図書館協議会（全国立大学加盟の団体）では、大学図書館のあり方について、つぎつぎと問題が提起されて来ている。これに対して、多くの大学で図書館のあり

方について、慎重有益な議論が展開している。

京都大学でも、このような論議の必要はもはや避けられないところまで来たように思われる。附属図書館の商議會や各種の委員会で、これらの問題に取り組むことはすでに始まっている。また若干の進展 — 試行錯誤を経ながらであるが — もみられたといってもよい。しかし、問題の性質上、直接これにタッチされた教官職員の間だけに印象として残るにとどまり、まだ、全学の理解を得るには程遠い面のあることも否定できない。

今後は、静脩を通じて、附属図書館の場での教官・職員の努力の道すじを、全学の皆様にご理解頂くよう、努力することも欠かせぬものと考えている。同時に、全学の教官職員のご意見を、誌上を通じて頂くことにも努力したいと考えている。

— 資料紹介 —

Science Citation Index

— 特徴と使用法 —

昨年度 Science Citation Index (以下 SCI) の 1965 年～1969 年の累積版 (くわしくは Citation Index と Source Index の二つのパートで Permuterm Subject Index は含まず) が京大に備えられましたので、特徴— 実際の使用法等を御紹介します。この索引は使用に当って特別な主題や分類体系の知識等を必要とせず、検索方法は非常に簡単なものですから広く利用されるよう期待します。

1. 基本的な考え方

SCI は 1961 年に創刊され、既に 15 年の歴史を持っているにもかかわらず、目新しい、なじみのない索引と言う印象を与えています。これは索引を作る原理が他のものと全く異なっている所に原因があると思われまふ。学術論文は従前の成果をふまえて書かれ、この成果は引用文献として書誌的な事項を添え論文中に示されます。引用した

論文と引用された論文の間には (1) 取り扱かう主題の関連があること、(2) ある一つの論文を引用している二つ以上の論文間にも普通主題の関連がある (図 1 参照。論文 A と B は共に E を引用している。B と A の間には関連があると考えられるもの)。したがって引用・被引用の関係をたどって行けばある主題に関する文献を次々に検索できる、換言すれば、一主題に関する文献は引用・被引用の関係でネット・ワークを形成しておりこれを把握するのが非常に効果的な検索法であると言うのが SCI の基本的な考え方です。引用文献を次々にたどるのが有効で簡便な文献探索法であることは、現実に多くの研究者がこれを行っていることで一部裏付けられます。^{*注1} 例えば「研究者の情報要求と利用に関する調査の京都大学分集計結果について」(静脩 52 号) では「必要な情報をどこから得ていますか」と言う質問に対し、学内の研究者